日本記者クラブ

記者会見

移民社会に暮らすための心得

アーメッド・アブターレッブ・ロッテルダム市長

2017年 10 月11 日

15 歳でモロッコからオランダに移住し、イスラム教徒として初めてロッテルダム市長に 2009 年に就任した。市民の半数が移民の子孫で、174 カ国の国籍を持つ。何人に対してもオープンな「WE-Society」を提唱し、市政に取り組む。移民や難民が社会の一員として認められるためには次のプロセスを経なくてはならないと強調する。

「まずは言葉の習得。次に歴史を学ぶ。憲法について最低限の知識も求められる。社会が存続するための共通な価値観を受け入れる必要もある」。これを受容できず、社会に溶け込めないのであれば、自分にあった他の国に行くべきだという。自身の移民経験に基づいた発言には説得力があった。

司会：ヴィーラント・ワーグナー　日本記者クラブ企画委員（独シュピーゲル誌）
通訳：西村好美（サイマル・インターナショナル）

YouTube 日本記者クラブチャンネル動画

©公益社団法人　日本記者クラブ

司会（ヴィーラント・ワーグナー企画委員）
それでは、本日の記者会見を始めます。

きょうのゲストは、ロッテルダムのアーメッド・アブターレブ市長で、略歴はもう配付されていると思いますが、市長のプロフィールをかんたんに紹介します。

アブターレブ市長は、モロッコに生まれ、15歳のときオランダに移住されました。メディアと広報関係の仕事で、キャリアをスタートされています。国政レベルでは、社会雇用省副大臣を務められました。2009 年 1 月にロッテルダム市長に就任されています。

イスラム教徒の信者として初めて、ヨーロッパ大都市の市長になられたわけです。オランダでは、アムステルダムの近くのアルンヘム市にもイスラム教徒の市長が誕生したそうです。

アブターレブ市長は、誰に対してでも開かれた社会、「WE-Society」を提唱されています。ロッテルダム市はオランダ第二の都市であり、移民・難民の受け入れや同化の問題に直面されています。きょうはそのような観点から非常に興味深い話をうかがうことができるのではないかと思います。

私は、このクラブの企画委員でドイツのシュピーゲルの東京特派員のワーグナーです。本日の通訳はサイマルの西村好美さんです。

それで、市長、よろしくお願いします。

アブターレブ市長　皆さん、こんにちは。

今回の東京訪問ですが、経済界との関係強化が目的です。とりわけ、長年オランダ、そしてロッテルダム、あるいはロッテルダム周辺に拠点を持ち活動している日本企業との関係強化ということです。

もう一つの東京訪問の目的はオリンピック関連です。オランダのオリンピック委員会が、2020 年の東京でのオリンピック・パラリンピックに向けて、昨日、日本側当局と障害者スポーツの分野において、今後の交流、協力のための覚書を調印しました。

あすは小池知事との会談も予定されています。午後には大阪にまいります。大阪は、ロッテルダムとの間での貿易も非常に盛んな都市だからです。

金曜日にはオランダに向けて立つ予定であります。実は、もともとは土曜日に出発のつもりだったんですけれども、実は先週、アムステルダムの市長がお亡くなりになり、その葬式に出席をするということで予定を早めました。

私のほうから、ロッテルダム市を運営するに当たっての幾つかの考え方をご披露したいと思います。

市政最大の課題は移民問題

市、政府の職員、あるいは市議会議員とともに、現代の都市としてのさまざまな課題に見舞われているロッテルダムをどう前に進めるのか。私どもが直面しているのは、やはり移住の問題です。

市民の半分は、もともと移民の子孫です。これはかなり大きな人数と言えるのではないでしょうか。世界中から人が集まっています。174カ国の国籍の住民、さまざまな言語、文化、そして宗教が集まっている都市がロッテルダムということです。

ロッテルダム市は、いくつものすばらしい物理的な橋がかかっています。これはインターネットでごらんになっていただければわかります。しかし、物理的な橋と人と人の間を橋でつなぐこととの間には、大きな違いがあります。

例えば、私が 10 億ユーロを手にしていたとします。それならば、マース川の上に物理的な橋をかけるというのはたやすいことでしょう。しかしながら、同じく 10 億ユーロを持っていたとしても、174 の異なる国々から来ている人々の間にかけ橋を築くというのはなかなか難しいことだと思います。

それは、時にして政府にとっていら立ちの種になります。人は、えてしてこう考えがちです。十分な資金を持てば、そしてすばらしいアイデアを生み出すことができれば、ほとんど全ての問題は解決できると。しかしながら、この人と

人の間のかけ橋を築くということ、あるいは、この都市に平和をもたらすということは、それほどたやすいことではありません。予算の問題でもない。政策作りの問題でもないからです。

例えば、若いカップルがいたとします。そして、住宅を求めていたとします。ところが、彼らに対して、移民のために仮設住宅を提供しなければならないので、あと 1〜2 年待ってくださいと頼まなければならない。これは、なかなか言いにくいことです。

長年にわたってロッテルダム市で働いてくれている、そして税金も払ってくれている人たちに対して「あなたたちよりも先に、移民の人たち、難民の人たちのことを考えなければなりません」と言うのは、なかなか難しいことです。

政策をつくる、そのために書類を作る、プレスリリースを出す、テレビ・ラジオなどを使って説明する、私の経験から言えば、こういったやり方は、あまり効率が良いとは言えないということです。非常に複雑な問題について、市民の支持を取りつけるのはなかなか難しいということです。

私自身は 2009 年に市長になって以来、時間をかけて次のようなことをやってまいりました。市のあらゆる地区のコミュニティに出かけていって、最も脆弱なコミュニティと言われるようなところを特に選んで出かけていって、年に 20 回、30 回ぐらいやっているんですけれども、市民との集会というのを開催してきました。

正直でオープンな対話を優先

学校などの場所に市民の方々に来てもらって、市長のほうから非常に複雑な問題を取り上げて、話し合いましょうということをやっております。正直に、非常にオープンに、透明性ある形で、議論ということではなく、あくまでも双方向の対話という形で、これまで 8 年以上、私はこれを心がけてきました。市民に対し、ある政策をつくってそれを発表するよりも、これがもっと効果的に対応することができる方法だと思っております。

一つの例を挙げたいと思います。あまりにも率直な物言いになり過ぎるかもしれませんけれども、それを前もっておわびを申しあげておきます。正確に実際に起こったことをお伝えしたいというためだからです。

オランダ政府から、ロッテルダム市に、シリアなどからヨーロッパに押しかけてきている、いわゆる庇護を求める人々のためのセンターをつくってほしい。600 人を受け入れるためのセンターをつくってほしいという要請がありました。市、政府としてもこれを決断しまして、あるコミュニティを選んで、そこにセンターをつくるということを決めました。その上で、そのコミュニティに出かけていって、ここでつくるんですという説明をすることになりました。

そのコミュニティの人たちは、失望したと思うんです。われわれが前もって対話を持ったうえで決定をしなかったということですから。どのコミュニティに行っても受け入れてくれるようなところはゼロだろうと思ったので、交渉の余地のない形で、正直に、ここでつくりますという宣言をする形になったわけであります。

大きなテントを張って、そこに 600 人以上が参加をしました。こちらから一言言う前にみんなが叫び出すという、そういう状況になっていたわけであります。とりわけ、前列にいた市民の一人が私を指さして、「あんたはばかだ（アスホール）」と、もう怒鳴りつけられたわけであります。非常に透明性高く申しあげているわけですけれども、その人は本当にそのように思っていた。そういう感情があったということだと思うんです。

これは全国にテレビで生放送をされておりました。ですから、私がそういう立場に立たされているということも放送されていたんです。その男の人に私はばかだと決めつけられた。ＳＰに囲まれていたんですけれども、その「ばかだ」と言った男の人が、後でつかつかと私のところまで来まして、「あんたはばかだけれど、良いばかだ（グッド・アスホール）」と言ってくれたんです。

私は、そういう市長であり続けてきていると

いうことです。時には対決も辞さないということです。やはり必要なときにはリーダーシップを発揮しなければならないからです。そのようにして、ロッテルダム市にとっての平和を守ってまいりました。地域社会にとってはなかなか受け入れにくい、難しい決断もしなければならないということがあるからです。しかし、そういう決定をしたときには、オープンに、正直に、対話をもって、伝えるということをやっております。

難民へ「ノー」と言えない歴史

そのときに私は、そのコミュニティの人々に、こう話しかけました。これから皆さんと対話を持ちたいということです。ただ、これはもうすでに決定されたことです。しかも、ロッテルダム市にとっては重要な決定なんですと。市長として、これは重要と考えました。国からの要請もあったからです。

ロッテルダム市は、負の歴史を持っております。（第二次大戦で）ドイツの空爆を受けた中心部は破壊され尽くされました。1,000 人が亡くなった。75 年経っても、ロッテルダムの復興・再建は実はまだ続いているんです。われわれは、ロシアやポーランド、あるいはイギリスやアメリカ、カナダの兵士たちによって解放されました。

イギリスは、いろいろな食料を飛行機から落とすという形で届けてくれました。ですから、ロッテルダム市は、戦争ということを熟知しています。苦しみがどういうものかということもよく知っているということです。

戦後は、飢餓によって何千人もの人が亡くなりました。国際社会の援助を受けて、ようやくここまで来た。ですから、600 人の難民にノーとは言えないということです。そういう歴史がある。だからこそ、ロッテルダム市政府も、そして市議会も、このような決定を下したのです。

ただ、その地域社会の住民にとっては、歴史は、もう昔のことです。75 年も経っているので、なかなか受け入れにくいというのはあるでしょう。ですから、そのために、オープンな議論をしたいと考えました。時にはリーダーシップを発揮せざるを得ない。しかしながら、透明性を持って、正直にそれを伝えるということです。集会の場をつくって、コーヒー一杯お互いに飲みながら話し合いましょうということです。正直に、透明性ある形で、必ずしも大きな予算をつけて解決しようということではなく。

これが「WE- Society」と私が呼ぶところの 1 本目の柱です。

2 本目の柱があります。それは、移民たち自身の対応です。私のメッセージは、これはたやすいことではない。時には彼らに非常に厳しいことが要求されるということです。

移民がオランダに到着します。彼らは、自分の自由意思でオランダに来たわけです。それでオランダに受け入れられた。1 日目あるいは 2 日目から、市民権を獲得するための努力が始まります。完全に社会の一員となるための。これは、もちろん、ただというわけにはいきません。非常に高くつく。非常に厳しい努力が必要です。

まず、言葉を覚えなければなりません。その町に居続けたいならば、やはり言葉というのが肝要であります。それから、その国の歴史を学ぶ必要もあります。

そして、第 3 に、これも大変重要だと思うんですけれども、いささかの憲法に関する知識を持たなければなりません。その国の規範というのは、何といっても憲法に体現されているからであります。

4 つ目は、文化であります。オランダの文化の全てを受け入れなさいと言っているわけではありません。ただ、社会として存続していくための共通の価値観を受け入れる必要があるでしょう。

この 4 つが、新しくオランダに来る人たちにとって、社会に統合されるうえで重要な要素と言えると思います。

そろそろまとめに入ります。いわゆる社会への統合のうえで、重要な 2 つの言葉があります。1 つは、アイデンティティーということ。2 つ目は、ロイヤルティーということです。

市民権取得時に義務も発生

アイデンティティーというのは、その人自身をいわばつくっているものです。身体的なものとか、あるいは個人的な嗜好と性向といったようなものであります。ジャガイモは食べるけれども、お米は食べない。それは結構です。お肉は食べるけれども、魚は嫌だ。それも結構だと思うんです。これはあくまでも個人としてのアイデンティティーだからです。あるいは、キリスト教を信じている、仏教だ、自分はイスラム教徒だ、あるいは無宗教だ、それも結構です。それは個人の嗜好ということだからです。

しかしながら、ロイヤルティーというのは違います。誰に、どこに忠実なのかということ。すなわち、3つ4つの異なる体制に忠実なんていうことはありません。オランダに来たならば、やはりオランダに忠実でなければならない。それは、人の気持ちということだけでなく、オランダのパスポートを受けたということならば、ということです。

私自身は、実は、二重のパスポートを持っています。モロッコのパスポートも家にはあると思うんですが、どこにあるかわからないぐらいなので、全然使いません。市民権を得たときには、同時に義務も発生するということです。新しいパスポートを受け入れたならば、そのパスポートの国に忠実でなければならない。

この統合のプロセスは、いわば車の運転に例えることができると思うんです。例えば、高速道路に乗ろうとする。どう合流していくのか。この車の流れの中で、誰かが譲ってくれなければ合流はできないわけであります。

誰かがスペースをつくってくれるからこそ、あなたの車はそこに合流できるわけであります。既存の国がスペースをあけてくれる。ですから、あなたは合流できるわけです。その社会に統合をされることができる。そういう理念で私はこれまで、この平和と、そして治安、あるいはこの社会の正義を推進するということをやってまいりました。それこそが、いわば社会の統合と思っているからです。

最後になりますけれども、このプロセスにおいて、オランダを国として選んだ、オランダに行こうと決めたならば、その社会に融合しなければならない。溶け込んでいかなければならない。それを拒否するならば、拒否する力があるかどうかということは別ですけれども、あなた自身がそれを嫌だと思うならば、私はそういう人には厳しいことを言わざるを得ないということがあります。

自問自答をしてみてください。その社会が嫌だと思うならば、ほかの国に行くべきなのではありませんか。もっと自分に合った社会に行くべきではないでしょうかということです。

憲法について異議がある、その国の規範について異論がある、その国の基本的な価値観を拒否すると。その社会に溶け込めないならば、みずから自問自答してみてください。本当にその社会に残るべきなのかということです。

私は何度も、こういうことをオランダのテレビで議論しました。そのたびに、とりわけ移民の人たちから怒りの声が上がります。ただ、私は、理解できないんです。私が言っていることは普通のことじゃありませんか。

この国に来るならば、初めから合わないならば、その国を選ぶべきではないのではありませんか。別の国に行けばいいだけじゃありませんか。ロシアとかアイスランド、スーダン、アフガニスタン。世界は広いんです。どこでも行けるはずであります。その社会に異論があるならば、なぜその社会に害をなすことを選ぶのか。

例えば、フランスで起こりましたね。カラシニコフを掲げて、人々を殺し回った。何でそんなことをするのか、異論があるならば出ていけばいいだけじゃありませんか。スーツケースに荷物を詰めて。

私は、こういう厳しいメッセージを申しあげます。なかなか受け入れられないところもありますけれども、私はこれを強く信じております。アラブにもことわざがあります。「ある社会に40 日間以上滞在したならば、もうあなたはその社会の一員なんです」ということです。もともと自分が受け入れられない社会ならば、別の

ところに行けばいいだけじゃありませんかということです。

「WE- Society」というのは、全ての人にスペースを提供しようという考え方であります。過激な思想でさえ、私は受け入れたいと思っています。社会学あるいはエネルギー転換政策、あるいは政治の世界での過激な考え方、いいじゃありませんか。ただ、武器を持って、それを使用するといったような過激な思想は絶対に受け入れられません。これは簡単なことではないかもしれませんけれども。実は、このテーマについて本を書きました。厚い本です。それを2、3 分で、そのエッセンスだけをまとめて申しあげました。

（質疑応答）

司会　本当に興味深いお話をいただきまして、ありがとうございました。

では、これからは質疑応答に入ります。時間はたっぷりありますから、最初の質問は私のほうからさせていただきます。

日本は島国で移民のことをあまり重視していないということで知られています。先ほどの「WE- Society」のお話は、日本にとって、どこまで参考になると思いますか。

アブターレブ市長　世界は、ますます小さな村になりつつあるということが言えるでしょう。オランダから日本に来るのに、たった 10 時間です。それほど近くなっているということです。長年にわたって人は、国際関係というのは、物とかコンテナの交換だけで成立しているんだと思っていました。それは誤った考え方です。その後ろには人間がいるということです。

日本はいま、人口が減少しつつあります。どのような国であれ、これは島国であろうとなかろうと、それぞれの国内政策は、その国が決めるものであります。それぞれの国が抱えている問題にどう対処するかは、その国がもちろん決めるべきであります。私のほうから、例えば日本の移民政策についてああせよ、こうせよと言う立場にはないと思っております。

ただ、ロッテルダムは非常に複雑な社会であります。その社会の治安ですとか、あるいは社会正義をどう維持し、構築していくのか、これは非常に複雑な問題でもあります。ロッテルダム市というのは、ニューヨーク市と同じほど複雑な社会だと思っております。ニューヨークのほうがロッテルダムよりもはるかに大きな町なんですが。

ロッテルダムにいるときによくジョークをとばすんです。初めてこの町にやってきた外国人は、掃除係になる。その次の世代は、例えばレストランの調理係として働く。だんだんとより複雑な仕事についていく。だから、ロッテルダムのような複雑な社会を運営していくためには、(自分のような)外国人が一番向いているのではありませんか。このジョークは、ロッテルダムでは大歓迎されます。受け入れられます。

国の文化ということ、どのように社会を構築していくのかということ、それはそれぞれの国が決められるべきだと思うんです。日本に来てまだ 2 日ほどですけれども、ホテルの中でも、あるいはいろいろな店などにも出かけていきますと、いろいろな人が働いています。

ドイツ人とかベトナム人とかフィリピン人、あるいはホテルのメイドさんもインドから来ていたりします。本当にそれほど閉鎖的な社会なんでしょうか。もちろん、どうするかということは、この国が決められるべきことであります。その国をどう維持していくのか、どう決断をするのかは、その国が決めるべきだとは思ってはおります。

質問　市長が、いまおっしゃったように、日本はもちろん、難民の年間の受け入れが 100 人にも満たないような、非常に少ない社会で、移民も受け入れていません。しかし、短期契約者や研修生として数多くの国籍の人が働いています。その場合に、社会保障を受けられるように日本国籍を与えるのかどうかは非常に難しくて、なかなか決断ができないんです。ロッテルダムの場合は、先ほどの 600 人のシリア難民は国籍をもらえるんでしょうか。社会保障は

どうなんでしょうか。

アブターレブ市長　先ほど、この庇護を求めている 600 人の例をお話ししました。実は、ロッテルダム市は、毎年 1,500 人から 2,000 人ぐらいの難民を受け入れています。毎年です。毎年です。毎年です。

私が市長を務めるような市ならば、絶対、道路上で寝なければならない、そんな形では受け入れません。それが私の思うところの文明の最低基準だと思うからです。

また、一流だから受け入れるとか、二流だから受け入れない、そういうことも絶対にあり得ません。皆同じ人間で、あなたは私と同じ人間だということです。

難民認定により完全な市民へ

まだ手続を済ませていない人たちは別として、そういう人たちはまだ残るかどうかわからないという状況ですので。ただし、一旦受け入れれば皆同じということであります。難民として認定され、受け入れた途端に、その人は完全な市民としての扱いを受けるということです。

オランダの憲法の第 1 条では、保護ということが規定されています。これは、「オランダ人」という書き方ではなく、「全てのオランダの国土にいる人」という文言になっております。そういう人に対しては等しく保護しなければならないということです。

政府の扱いも、等しくなければならないということです。肌の色とか、宗教とか、性的嗜好にかかわらず、全て同じ扱いを受けるということです。社会として受け入れを決めた人については、庇護を求めた人、受け入れられた途端に法的な地位というのが与えられる。その後はずっと等しい扱いを受けるということです。

この規程によりますと、まずは一時的な滞在者として認められるということです。そして、5 年後にオランダのパスポートを申請することができるという形になっています。

忘れてはならないのは、この大量の難民が、実は先進国にばかり存在しているわけではないということです。ガーナにも大量の難民が受け入れられております。ほんの少しの米で日々生きなければならない、そういう国で大量の、オランダよりもはるかに多い難民を受け入れている。ガーナは世界でも最も貧しい国の一つです。

世界には 6,000 万人以上の難民がいると言われております。その中には、気候変動がゆえに干ばつが起こったから国を離れなければならない人もいれば、戦争のために離れなければならないといったような人たちもいます。

ノーベル賞を受賞したオランダのティンバーゲン教授ですが、彼は、大きな富を分かち合おうと、人々と共有しようということを広めた方です。それが、ノーベル賞の受賞理由です。

この西洋のモノの見方、それから、世界がヨーロッパをどうみているのか、いろいろなことがあるかと思うんですけれども、人々と分かち合っていこうと思うかどうか、それを受け入れるかどうか。時には、入ってくる人たちがいろいろな富を持ち込むということもあるでしょう。その逆の場合もあるということです。

どういう政策をとるのかは、それぞれの国の判断ということであります。移民、移住の問題というのは、さまざまな理由が背景にあります。その移住の問題をどう受け入れるのか、あるいは、そのさまざまな理由についてどう考えるのか、それは、それぞれの国の自由ではありますが、ただ、事実としてあるということを考えてください。

オランダよりもガーナのような国がはるかに受け入れている。しかも、オランダは、経済の規模では世界 16 位であります。ガーナは、はるかにはるかに下のところにいる。その事実をもってして、皆さん考えてください。

質問　ロッテルダムのような多国籍の都市の市長として、3 月のオランダの総選挙の結果をどう評価されていますか。難民受け入れ政策に反対の党がかなり票をとったということとそのような世論をどうみていますか。

アブターレブ市長　選挙というのは、おかしなものだと思います。やはり国民感情の反映ということも言えるのではないでしょうか。ただ、あのような選挙の結果になった同じ国で、私のような履歴を持った人間を市長に選んでくれたわけであります。

実は、選挙の前に世論調査が行われました。そのときに、この私に対し、非常に高い信頼が寄せられているという結果が出たわけです。多くの人から言われました。国政に出よと、出馬せよと、立候補せよと言われたんですけれども、私はそれを拒絶しました。それは、私はロッテルダム市に対する義務があると思っていたからであります。

確かに、ＰＶＶ（自由党）に多くの人が票を入れた。それはやはり、社会の感情のあらわれと言えるのかもしれません。

ただ、同じ人たちに、では私に票を入れるかと聞いたならば、イエスと答える人も多くいると思うんです。ですから、彼らは必ずしも人種差別主義ではない。反イスラムではないということです。それぞれ、この政治、このシステムの中で立場の表明というのがあるでしょう。

ただ、世界で言われているように、彼らは差別主義に走ったわけではない。ただ、この政権が、きちんと彼らが問題だと感じていることに対処してくれなかった、その懸念のあらわれだと私は受けとめております。

その懸念に対して、私は、私なりのやり方で対処しようとしてきました。先ほど申しあげましたように、さまざまな地域社会に出かけていって、対話を持つということです。町の声を政治に反映させたいと思うからであります。

ですから、もちろんオランダでも、あるいは世界のどこでも同じだと思うんですけれども、差別主義者というのはいるでしょう。ただ、全ての人がそうだというわけではないということです。

ですから、選挙は、あくまでもその社会の考え方の反映ではあると思うんです。きょう、ようやくオランダで連立政権ができようとしております。自由党は、これまでもいわゆる国政の中心についたということは一度もなかったわけです。

すなわち、必ず中道寄りの政党が力の中心にい続けたということがあります。オランダが国として寄り立つようになってから、極左であれ、あるいは極右であれ、この権力の中心を握ったということは一切ありませんでした。

質問　移民あるいは移民の子孫たちが、密集して住む地区があります。そうしますと、そのコミュニティとほかの住民たちとの緊張関係がままみられるということが起こりがちです。ロッテルダム市の場合はいかがでしょうか。

社会状況より人の資質が重要

アブターレブ市長　いつも聞かれる、大変おかしな、奇妙な質問だと思うんです。

私はもともとモロッコで生まれました。山の中の小さな村出身なんですけれども、一つの教室に 40 人もの生徒が集まっていました。全員モロッコ人なんです。でも、それだけいても全然問題ではありませんでした。ですから、同じ人種、同じ特質を持った人を 1 カ所に集めたとしても、それ自体は問題ではないわけです。

同じ教室から、モロッコでも著名な医者が生まれました。そして私、ロッテルダムの市長も、同じ非常に寛容な許容性のある教室から生まれたわけです。ですから、社会を取り巻くさまざまな状況ということではなく、その人その人の資質ということが重要なのではないでしょうか。その人の皮膚の色とか、置かれている社会的な状況ということではなく。

これも奇妙な話かもしれませんけれども、オランダの農家からも多くの移民というのが実は出ています。ニュージーランドやカナダやオーストラリアに移住したんです。そういう人たちが移民になる前に、必ずオリエンテーションというのを受けました。

彼らが目指したのは、例えばカナダでもともとオランダ人の移民が住んでいる、そういう村を目指していったということです。ですから、

オランダに根を持っているような人たちということです。1945 年当時の音楽を好むとか、あるいは、オランダのチーズが大好きとか、また、オランダから輸入をした食品が大好きという人たちが住んでいるところです。

あなたが、あすオランダに移住しようと決めたとします。オランダにやってこられて、お米を食べなくなるなんてことはあり得ないと思いますよ。ジャガイモを食べないなんてことはあり得ないと思いますよ。

移民はゼロから出発する

ですから、あなたの質問には、実は重要な問題が隠されているわけです。これは、この皮膚の色とか、あるいは人の資質とか関係なく、あなたが移民として移住した場合には、ゼロから出発しなければならないということです。何も持たずに行くわけです。誰もあなたを知らない。身分もない。非常に複雑な問題にぶつかるということです。

一つ例を挙げましょう。私は、あるとき、本当に美しいイラク人の男性に出会いました。その人は、中古の家具を売っているお店の掃除係だったんです。そこに中古のピアノが持ち込まれました。そうすると、そのイラク人が椅子に腰掛けて、ピアノで演奏を始めたんです。演奏したのはショパンの曲でした。

その人に対して、オランダ人があなたはどういう資質を持っているの、どういう能力を持っているのということを聞いたのは初めてだったそうです。彼は、実は、バグダッドの音楽院で教育を受けた音楽家でした。だから、店のオーナーもこのことを始めて知ったわけです。

移民として来たときには掃除係から始めなければならなかったということです。その日私は、その話を聞いて、クリスマスの日に市庁舎で彼に演奏してもらうことにしました。そして、そのイラク人は、そのときから自分の指を、白い布を巻いて守るようになりました。

私は、基本的な理念を持っております。新たにオランダに入ってくる人たち、移民たちに対しては、もう最初から完全な市民として扱うということ。そして、自分で自由に選んで、世界中どこでも飛んでいけるようにするということです。

私に 10 ドルお金をくれたならば、最初の 1 ドル、次の 1 ドル、そしてその次の 1 ドルも、全て教育に投資をすると思います。すなわち、社会の中で希少な資源と言えるような労働市場、あるいは医療保険、あるいは住宅、そういったものを手に入れるためには、何といっても教育。教育によって人々は平等になれるということです。下から始めても、教育によって社会でもっともっと上に上がれる。

私自身がそうでした。教育のたまものと言えます。私自身、12 年間学校で学んだわけですけれども、計算すると、年に 5,000 ユーロとすると、6 万ユーロ分かかっているわけです。しかし、私は、その後、税金で、その 100 倍分もオランダに返しているわけです。

ですから、一番よい投資は何といっても、とりわけ新たに移民として来る人たちに、一にも二にも三にも教育を施すということでしょう。それによって完全な市民となって、よりよい住宅、よりよい雇用を手に入れることができる。唯一の道は、やはり厳しい道と言えるでしょう。

質問　いまミャンマーで問題になっているロヒンギャ族の問題です。多くがミャンマーから追放されて隣のバングラデシュなどで苦労しているわけです。こういう問題がなぜ起こってくるのか。宗教的対立、民族的対立、あるいは階級的対立をなくしていくというのはなかなか難しいことではあります。

結局、解決策は、人間愛にしかないのではないかと思いますけれども、ご見解をうかがいたいと思います。

多数派が少数派を守るのが民主主義

アブターレブ市長　私はオランダの外務大臣でもありませんので、この問題についてコメントする立場にないと思います。ですから、オ

ランダ政府の立場を説明させていただきます。

オランダとしても、いまの状況については不満を感じているということです。国連の事務総長も、ミャンマーの指導部に対し、「行動をとれ」、「少数派を守れ」ということを呼びかけております。当初は国連も沈黙していましたが、いまは取り上げるようになっている。一度、二度ほど事務総長が呼びかけをしておりまして、オランダ政府もそれを支持する立場にあります。もっと圧力をかけるということであります。ミャンマーの指導部に対し、行動をとれということです。村を離れなければならない、時には村々が焼かれているというような悲惨な状況であります。

ただ、私は、こういう問題にお答えする適切な人間ではありません。一般的な知識しか持っておりません。テレビなどでみたもの、あるいは国連の呼びかけとか、オランダ政府が言っていることしか知りませんが、できる限り、タイやインドネシア、バングラデシュに行ってしまった人々がふるさとに戻れるようにしてあげるべきではないでしょうか。

一般論で申しあげたいと思うんですけれども、国にとっての文明はどういうものなのか。これは、多数派が少数派を保護してこそということです。それが民主主義の一番の基本だと思っております。

イラクでもうまくいかなかったのは、選挙の後、多数派のシーア派が少数派のスンニ派を守らなかったからであります。

民主主義というのは、3つの基本的な要素がある。1人1票ということ。そして、多数派が統治をするということ。しかし、一番何といっても重要なのは3つ目でありまして、多数派が少数派をきちっと保護するということです。その教訓が学べなければ民主主義ではない。民主主義というのは、多数派が少数派を守る義務があるということです。私はそう信じています。

司会　大変参考になるお話をいただいて、本当ありがとうございました（拍手）。

（文責・編集部）

■アーメッド・アブターレブ氏　略歴

1961年モロッコ生まれ。技術系専門学校でテレコミュニケーションを学び87年卒業。オランダのテレビ、ラジオ等のメディアでキャリアを積む。その後、福祉健康文化省の報道官、社会経済カウンシルの広報部長、オランダ統計局および多文化開発研究所FORUMの広報部長を務めた後、アムステルダム市の市会議員として活躍。教育、中東の平和活動、都市問題分野にも精通。2007年2月にバルケネンデ政権の社会雇用省の副大臣に任命される。09年1月、ロッテルダム市長に就任。

Ahmed Aboutaleb Mayor of Rotterdam

Ahmed Aboutaleb was born in Beni Sidel (Morocco) on 29 August 1961. After completing his secondary education, he attended an institute of technology, graduating in telecommunications in 1987.
He worked as a presenter for an educational television station (RVU), as a programme maker at Radio Stad Amsterdam and Radio Noord-Holland, and as a reporter for Veronica Radio, NOS Radio and RTL4 news. From 1991 to 1994 he was a press officer at the Ministry of Welfare, Health and Cultural Affairs. Up to 1997 he was head of information at the Social and Economic Council (SER) and until 1998 manager of the Communications and Publications Sector at Statistics Netherlands (CBS). In 1998 he became director of the FORUM Institute for Multicultural Development and in 2002 of the Social, Economic and Cultural Development Sector of the municipality of Amsterdam. In 2004 he was appointed to Amsterdam's municipal executive as alderman for Work and Income, Education, Youth, Diversity and Urban Policy.
Mr Aboutaleb was also a member of the Supervisory Board of the Mondriaan Education Group in The Hague, and of the Education Council. He helped to set up the Dutch Coalition for Peace in the Middle East and has been a member of the urban policy review committee, and of the board of Babylon, a centre for multicultural studies at the University of Tilburg.
On 22 February 2007 Mr Aboutaleb was appointed State Secretary for Social Affairs and Employment in the fourth Balkenende government.
Ahmed Aboutaleb was installed as Mayor of Rotterdam on 5 January 2009.